

たまやう

霧の恋歌
(上)

高橋 治

新潮文庫

さまよう霧^{きり}の恋歌^{こいうた} (上)

新潮文庫

た - 44 - 6



平成六年十一月一日発行

著者 高橋 治^{おさむ}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三二六六―五一

編集部(〇三)三二六六―五四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛へ送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Osamu Takahashi 1991 Printed in Japan

新 潮 文 庫

さまよう霧の恋歌

高 橋 治 著

新 潮 社 版

目次

第一章	桐の花咲く……………	七
第二章	谷に霧舞う……………	五
第三章	その日を待つ……………	一五七
第四章	平泉寺炎上す……………	三三七
第五章	影を追う……………	二八三

さまよう霧の恋歌

上
卷

第一章 桐の花咲く

「あの」

女の声に、武部宗明は長屋門の方に振り向いた。

いつ来たのか、道の向う側に停めてある武部の濃紺のフランス車を背にして、女が立っていた。

「お宅様に、お腰のものが、おありでしょうか」

女は自分の意志より先に言葉が口をついてしまうようないい方をした。

「は？」

武部はたった今自分の聞いた言葉が信じられず、響き返すほどの間合いで聞き返した。

「お刀です」

女はまた意志では禦しきれないような言葉を戻して来た。

どこかでなにかを聞いて来たのだろうかとの疑問、いや、そうではないという直感、二種のもものが頭の中で交錯した。

武部は前庭を掃き清めていた箒を主屋の棟を越すほど高い夏椿に立てかけた。大事にして
いる苔を傷つけぬために、掃除の時には藁草履をはく。その草履で、門から玄関を結んでい
る踏石の上に、身軽に飛んだ。

両側を縁石で囲い、半歩ほどの幅に置いた踏石の隙間を、細かい砂利で埋めてある。その
上に立って、武部は女に軽く会釈した。

「あら」

自分が挨拶の言葉もかけていなかったことに気づいたらしく、顔に狼狽を見せた。

「失礼致しました」

小声でいいながら、上体を折った。深く折り屈めたせいもあって、淡い洗朱の襟の奥に、
うなじが背に流れるあたりの素肌の白さが見えた。

起き直った女の左半身に十五センチ幅ほどの、濃淡の藍の縞が流れている。深い藍から水
縹色まで五色、縹縷と呼ばれる色の変化が三度繰返され、その左右は大胆に幅広にとった濃
紺の中にとけこんでいる。

その縞が左手は袖口に、右は僅か肩口にかかるあたりに流れ、襟に使われた濃紺が、左半
身の縞を斜めにたち切っている。

洗朱の襟には、地色よりやや濃く染めた同色の糸で桔梗が刺繍され、雄蕊に使われた白糸
が鮮やかに浮き上っていた。季節を先どりした着巧者らしい襟の使い方である。
帯も白の紬、墨絵で斜めに三本の桔梗が描かれていた。

「あの、お刀といわれますと」

武部は聞きながら門の内側へ歩み寄った。

「は？」

女は怪訝^{けげん}そうな顔をした。

「私の家に刀があるかとお聞きになりましたが」

「そんなこと申しましたか」

今度は意志の命ずる通りと思える返事が戻って来た。女は僅かに眉根^{まゆね}を寄せた。

「どうということなのか」

武部は女の顔をしげしげと見つめ直した。突然、ひとの家の門前に立ち、刀があるかと聞く。それだけでもただごとではない。その上に、自分が口にしたこと自体に怪訝^{けげん}そうな顔をして見せた。

腹立たしいものと、ひよつとしたらどこかを病んでいるのではないかという戸惑いとを、武部は覚えた。そんな眼^めで見れば、頬^ほから顎^{あご}にかけての線に、心なしか翳^{かげ}りが感じられる。それは年齢から来るものではなかった。三十一、二歳、そこをこしていても、五、六というところまでは行っていない。女がまだ身内に貯^{たくわ}えていた稚^わさを、全部使いきってしまわずにいる年齢である。

そげた線を心もち元に返せば、ゆとりと自信が顔に戻って来る。武部はそう感じた。その分、総じて印象は面長^{おもなが}には遠い。だが、襟からすつとのびた首には贅肉^{ぜいにく}のかけらもな

く、そして長い。それが身にまといっている型破りな縹緞によく映えている。

武部は寄せた眉根に眼をやった。

眉が長い。一文字にぐっと上つて眦まなざりの上のあたりから、ゆるやかな曲線で落ちてゐる。多くの女がするように、眉毛を抜いて黛まゆずみで形を整えたものではない。そんな化粧の仕方は嫌いなのだといわんばかりに、生来の眉の長さを長いなりに生かしていた。

下瞼したまぶたは直線に近く、上瞼がその上で思い切った弧を描いていた。唇くちびるは形が逆になる。意志の強さを見せた上唇うわぐちびるが直線的で、下唇がふつくりと豊かに丸かった。その分、肉厚に感じられる。

結い上げた髪が耳にかかる辺でふくらみをまし、それが、どちらかというとき鋭さの見える顔をやわらげている。

「申訳ございません、私……」

心もとなげなものが、急に全身からあふれた。

「どうなさったのです」

武部は引きこまれるように聞いた。

「覚えておりません。なにを申し上げたのか、全く」

信じられない言葉だった。

「……私、どうしてここにいいのか、どうして見ず知らずの方にお声をかけてしまったのか」

「どこかお加減でも悪いのですか」

女はそれには答えなかった。

「お刀だなんて。……私見たこともないのに」

いうより早く頭を下げた。

「申訳ございません。失礼なことを」

一札した形で、そのまま二、三步体を背の方に向けてずらした。

詫^わびる気持を全身に見せて、女は帰って行こうとした。

「お待ち下さい」

武部は呼びとめた。その声で、女はもう一度武部の方に向き直った。顔に困惑が色濃く出ていた。

「これから、どちらへ」

「……はあ」

答える言葉をまさぐっているのが、武部にはよくわかった。

「……あの……わかりません」

困惑の表情が一層深まった。

その顔の横で、車から三、四メートル上になるところに、満開の桐の花が、澄み切った空を背景に浮いていた。

北陸には桐が多い。武部の住む福井県勝山市にも、いまだになんんかか桐を手がける職人

がいるくらいで、殊更（ことさら）に桐が目立つ土地柄（とちがら）なのだ。

その上、市の中心からやや離れた平泉寺集落（へいせんじしゅうらく）には、暗黙（あんもく）のことながら、花木や草花を大切に育てる伝統（でんとう）が生きている。

廃墟（はいきょ）の古刹（こさつ）、越路（こじ）の苔寺（こけでら）との別称を持つ平泉寺・白山神社を中心にして、最盛期六千坊といわれた大寺をとりまく集落である。それだけに、人々は古い家のたたずまいに花が欠かせないことをよく知っている。

すつくと立って、高く花を掲げる桐は、遠見にも人里を飾ってくれることを心得ているせいか、娘を授かった家は必ず数本の桐を植える。娘が成長して嫁ぐ時の簞笥（たんす）になるというような習俗はとうに失（う）せた。だが、桐を植えずにはいられない心配りに似たものは、いまだに生きている。

雪が少かったせいなのか、今年は桐がひと際（きわ）見事に咲いていることに武部は気づいていた。しかも、例年になく花期が早い。

この地方では、えにしだと桐は咲く時期が完全には重ならない。えにしだが黄金色を地表近くに氾濫（はんらん）させた後で、桐が紫の色を中空に散りばめる。それが今年は一緒に咲いた。その上に、どちらに眼を向けたら良いのかと困るほどの、花の当り年なのである。

その桐が、女の顔の周辺で、点々と紫の塊（かたまり）を見せていた。桐は葉に先立って花開く。細かく枝岐（えだわ）れした先端に咲く花だし、紫という強烈な花色（かしか）が円錐（えんすい）状の花序を作って、群れて咲くだけに、ある種の浮遊感を与える。

誰かがそこに絵具を投げつけ、それが固まって浮いたまま落ちて来ない。そんなふうにも見えるのだ。

武部が車を置く場所の向う側は崖がけになって耕地に下っている。下からのびた桐の花が浮き、その前で、女も頼りなく浮いているように見えた。ふっと傾いて、そのまま倒れてしまいそうな心もとなげなものが、女の全身を包んでいる。

それは女の返事のせいだったかも知れない。

「これからお出かけになる先がわからないといわれるのは……」

武部はそこでひと息おいた。女は恥しいことでも指摘されたかのように眼を伏せた。

「まだ、おきめになつてないからですか」

「いえ」

答えると同時に、伏せていた眼を、はじかれてもしたように武部に向けた。

「あの」

どう説明したものかという迷いと、片隅かたすみに追いこまれた獣が脱出路を探すのに似たせわしなさだが、両方の瞳ひとみに揺れていた。

「わからないのです、本当に」

強しいて押し出した返事だった。

「ここは勝山市ですから市には違いありませんが、不便なところです。福井に出る電車は沢山はありません。金沢に行かれるのであれば、北の峠を越した白峰村しらみねからしかバスがないの

です。その白峰へのバスは確か一日に二本で、この時間ではもう終バスもないと思います
が」

女は細かいうなずきで武部の説明に答えていたが、話の内容を把握はわしているとは思えなかつた。

「それとも、大野から岐阜県の方に知られるおつもりだったんですか」

「福井……金沢……岐阜……」

眩くらきに、それらの地名が信じ難いものだという響きがあった。

「勝山って……どこですの」

「どこ」という言葉が出るまでの間に、大分、間があった。そう聞き返すことで、相手を傷つけるのではないかと案じているようにも見えた。武部は西の福井に三十五キロ、北の金沢に七十五キロという位置関係を説明した。

「ここは勝山の平泉寺です」

「平泉寺……?」

その地名を口にするのが、明らかに初めてであるように聞えた。

「平泉寺へお出でになったんじゃないんですか。苔を御覧に」

「いえ」

今度はきっぱりした否定だった。

「では、どうして私の家の前などに」

「わかりません、それが。私にも」

言葉はまた元に戻ってしまった。しかし、今度は教えてくれといわんばかりに、^{すが}縋りついて来る光が眼の中にあつた。

「もし、御気分でも悪いのでしたら」

武部はもう一度つい今しがたと同じ内容のことをいった。

女は答えなかった。今度は打ち消しもせず、急いで歩き出そうともしない。武部には、矢張り、自分が案じている通りのことに思えた。

「少し、私の家で休んで行かれたらどうです」

女は驚いた顔で武部を見た。

「余り御無理をなさらずに」

武部はつけ加えた。そこまで自分から説明する必要はないのだが、一人住居の家に、見ず知らずの女を誘い入れることになる。ある種の^{ぐま}疚しさに通ずるものが、心のどこかにあつた。

「有難うございます。……でも」

「御遠慮なさらないで結構です。あなたがどちらへ行かれるにしても、送って差し上げなければ、この時間ではどうにもなりません」

武部は停めてある車を指した。

「仮に、勝山の町の中にお泊りになるにしても、あなたの足で歩ける距離ではありませんから」